

住民・来訪者の生活の風景の捉え方とイメージ生成に関する研究

—千葉県浦安市を対象として—

5213D039-0 松田 恵理子*

Eriko MATSUDA

本研究では、各地に多く存在する明示的な特徴を捉えにくい住宅街において、住民の生活により育まれた風景から、住民・来訪者という属性の異なる主体がどのように環境を眺め、イメージを生成するのかを写真投影法実験によって明らかにする。実験は東京郊外のベッドタウンである千葉県浦安市で、来訪者と住民を対象に行った。その結果、生活の風景に対する具体的想起特性には、個人による多様性が見られた一方で、生活の風景の捉え方に関して、住民・来訪者に共通する枠組みが存在することを明らかにした。

Keywords : 生活景, イメージ生成, ベッドタウン, 想起情報, 写真投影法

1. 研究の背景と目的

1.1 研究の背景

景観法制定から 10 年が経ち、各地で地域固有の景観資源を活かしたまちづくりが行われている。一方で景観法の課題点として、既に一定の評価が得られている特徴的な地域景観の保全に留まるものが多く、一般市街地などリアルな日常生活の舞台としての景観保全には至っていない事が挙げられている¹⁾。生活景という概念自体は 1990 年代後半からその重要性が指摘され、研究が進められてきた。しかし歴史のあるいは文化的蓄積が色濃く残る地域における生活景の記述や価値を捉える研究と活動は多くあるものの、郊外のベッドタウンなど、明示的な特徴を捉えにくい地域においては、依然としてその地域的生活景の記述や価値付けは留保されている。全国各地のありふれたこれらの身近な生活景は、来訪者の胸を深く打ち、印象深く心に残るようなものではなくとも、その地で生まれ育ってきた多くの人々にとっては原風景となる大切な風景であり、心の拠り所となりうる。ありふれた身近な生活景の、住民にとっての価値はこの点にあると言われている。

しかしありふれた身近な生活景の価値は住民にのみ認められるものなのだろうか。初めて訪れた場所なのに懐かしさを感じる、安心感を覚えるなどの体験は誰にでもあるだろう。それだけでなく、街中に見かけた人々の生活の痕跡に珍しさや興味を持って眺めることもある。これは、各人が生まれ育ってきた環境の中で知覚し、蓄積されてきた風景に対する見方や生活の捉え方と目の風景を無意識に照らし合わせている結果だと考えられる。このように住民の生活により育まれた風景から来訪者が刺激を受け、想像を広げ、意味付けできるという点に、ありふれた生活の風景の持つ、価値や大切さを見出す事ができるのではないだろうか。

1.2 研究の目的

本研究では、明示的な特徴を捉えにくい住宅街を対象として、住民の生活により育まれた風景から、多様な主体がどのように刺激を受け、イメージ生成をするのか明らかにすることを目的にする。特に、本研究では来訪者と住民のイメージ生成構造を比較検討する。本研究の分析結果によって、住民・来訪者間に共通する風景の価値や意味を把握し、何気ない日常風景の大切さを見出す着眼点になることを期待する。

2. 研究の概要

2.1 概念の整理

本研究における概念の説明を以下に示す。

1) 生活の風景

後藤によると生活景は「生活の営みが色濃くにじみ出た景観」¹⁾とされている。さらに、中村は「景観とは人間をとりまく環境のながめにほかならない。しかしそれは単なるながめではなく、環境に対する人間の評価と本質的な関わりがある」³⁾としている。そこで本研究では、生活景を図 2.1 に示す概念図のように捉え、議論を進める。生活の営まれる場において、その主体と環境の双方向の働きかけが積層し、可視化されたながめを生活の風景とする。さらに、それに対する評価など何らかの情報を想起し、照らし合わせながら観察者が認識した生活の風景を生活景と呼ぶ。

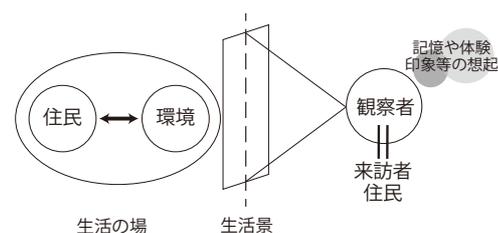


図 2.1 生活景の概念図

2) 生活感

大辞泉では生活感の定義を「(前略)住まいについて、いかにも人が暮らす所という感じ。」としている。本研究では実験の際に、被験者に生活を営む場として対象地を体感してもらうために生活感という言葉を用いて指示を与えるが、多様な生活の風景の捉え方を抽出するために、敢えてその具体的内容については明確な定義をせずに用いる。

3) 明示的な特徴を捉えにくい地域

本研究では、高級住宅地などといった第三者からの評価がなされておらず、普通の住宅地という印象が一般的であろうと思われる地域を言う。

2.2 既存研究

1) 生活景のながめの抽出に関する研究

尾野ら⁴⁾は、体験を記録した生活史を読み解き、生活風景の要素に対する人の認識構造を明らかにした。『街は記憶する』という書籍を対象に松下文法を基に名詞句の抽出を行い、文法における言葉同士の関係性からルールを作成し図化を行う事で、調査者の主観に左右されないより客観的な分析を可能にしている。この研究はあくまで人の認識に着目した研究であり、述部は名詞句の繋がりを明らかにする手がかりとしてのみ用いた為、生活風景の要素から受けた印象など、人の内面に関しては追究していない。

2) 生活景のながめの抽出とイメージ生成に関する研究

吉本ら⁵⁾は、写真投影法により人々の日常風景に対する視覚的情報としての捉え方を把握し、ヒアリングによって視覚的情報の内容と意味・背景等を把握した。この研究では風景の捉え方を視覚的情報に限定しており、その他の知覚には触れていない。

野崎ら⁶⁾⁷⁾⁸⁾は、「生活景ではそこで生活する人間と、建築や都市といった生活空間の関係が重要であり、生活の中から生きられる景観の意味をとらえる必要がある(中略)生活者である住民がその景観をどのように見ているか知る必要がある」とし、尾道市の住民を対象に、ヒアリング調査を行った。それにより住民の現在と過去の生活景に対する印象や、知覚に着目した生活景の捉え方を明らかにした。研究内では視覚以外の感覚によって捉えられる要素が記憶に残り易く、ヒアリング調査によって過去の生活景として捉えられたとしている。

古川⁹⁾は、生活景の実態把握とイメージ生成把握の双方から研究を行っている。「生活の営み」を、主体が行為を媒介して環境と関わり合うことと捉え、郡上八幡においてインタビュー調査によって生活主体が環境と関わり合う、過去、現在の行為を把握した。さらに、生活景を生み出し支えている生活主体が、自身の行為を含む生活景をどのようにイメージ、認識しているのかを明らかにした。

藤澤¹⁰⁾は、岐阜県恵那市の明知鉄道からの車窓風景を対象とした写真投影法実験を行い、社会的に共有された地域の風景でなく、個人の風景に関して、その捉え方とイメージ生成の多元

性を前提に、被験者間の相対的な差異を明らかにした。この研究では、人の風景を見るモードの存在を指摘し、その時によって風景の捉え方や形成されるイメージが異なる可能性を示した。

渡邊¹¹⁾は、住民は生活の場の一部になっており、自分達の暮らす場を評価したり価値を意識することは難しいとし、生活の場を外から眺める観察者のイメージに着目し、主体の多様な生活の風景の捉え方の枠組みを対象・観察者の内面の二つの側面から、写真投影法とインタビュー調査を用いて明らかにした。狭い路地などといった生活景のステレオタイプとは全く別の特性を持つありふれた住宅地においても観察者が内面を投影したり、共感できるような場所が存在することを明らかにし、さらにこのような「自己の内面を投影できること」や「共感できること」が、ありふれた住宅地の生活景の価値を考えていくうえで着眼点になる可能性を示唆している。

2.3 本研究の位置づけ

本研究は主体の多様な生活景の捉え方に着目した渡邊の研究を引き継ぐ。渡邊は東京都内という比較的密集した住宅街を対象に、来訪者にのみ着目して研究を進めた。本研究は、明示的な特徴を捉えにくい地域の生活の場である東京郊外のベッドタウンを対象とし、来訪者だけでなく住民にも実験を行い、生活の風景の捉え方やイメージ生成を分析する点に特徴がある。

より多様な主体の、生活の風景の捉え方やイメージ生成構造を比較検討し、住民・来訪者間で共有される風景の価値を見出す切り口となる点で有用性があると考えられる。

3. 実験概要

3.1 対象地概要

1) 対象地選定の意図

実験対象地は、明示的な特徴を捉えにくい地域とするため、急激な人口増加に伴い多くの住宅地が整備された高度経済成長期以降に新しく住宅地として拓かれた東京郊外のベッドタウンとする。さらに生活の場への着目を容易にする戸建住宅中心の住宅街であること、高級住宅街などといった社会的に共有された評価をもたないことを条件とした。そのため、実験の対象地を千葉県浦安市内の埋立て地域に位置する海楽地区とした。

2) 対象地概要

浦安市は図3.1に示すように、1962-1975年、1975-1981年の二回に分けて埋め立てが進められてきた。対象地である海楽地区は第一期に埋め立てられ、埋め立てによって市域が拡大する以前からあった元町地域と隣接する。埋め立て地のため地区内が起伏はなく、道路骨格は格子状の直線道路のみで構成されている。海楽地区は、やなぎ通りと呼ばれる県道により地区内を分断されている。現地調査で多様な生活感が確認できた西側の経路を図3.2のように設定し、実験を行った。

3.2 実験概要と方法

表3.1に実験概要, 表3.2に被験者の詳細を示す. なお実験方法を確定するためにほぼ同様の方法で予備実験を行っている.

表3.2のa1~6は建設工学専攻の学生, b1~6はその他の学生, c1~5は対象地の住民である. 写真投影法実験では被験者にGPS機能付きデジタルカメラと経路地図を与え, 表3.1に示した指示を伝えた. インタビュー時はパソコンで写真を確認しながら発話内容をボイスレコーダーで録音した. なお被験者c4, c5のインタビューについて, 被験者の意向を踏まえ他と異なる方法を取った. c4は写真を撮りながらその場でインタビューを行い, c5は被験者のみでルートを歩き, 写真撮影後, 各写真に対するコメントを添えてメールにて送ってもらった. そのためc5は白

表3.2 被験者属性と実験日時の詳細

属性	被験者 NO.	居住年数	年齢	性別	月日	天気	街歩き時間	撮影枚数 (有効枚数)
学生来訪者 建設工学専攻の	a1		23歳	男	6/21(土)	晴れ	14:35~15:00	34(33)
	a2		24歳	女	7/5(土)	曇り	10:40~11:05	24(23)
	a3		22歳	男	7/5(土)	曇り	13:40~14:00	34(33)
	a4		22歳	男	7/6(日)	晴れ	10:25~11:10	66(57)
	a5		22歳	男	7/6(日)	晴れ	12:30~12:55	54(53)
	a6		21歳	女	7/6(日)	晴れ	14:50~15:05	22(22)
その他の学生来訪者	b1		23歳	女	9/29(土)	曇り	14:00~14:30	44(42)
	b2		23歳	女	10/11(土)	晴れ	12:55~13:20	33(27)
	b3		24歳	男	10/12(日)	晴れ	11:35~11:55	28(23)
	b4		23歳	女	10/19(日)	晴れ	13:05~13:30	79(78)
	b5		24歳	男	10/19(日)	晴れ	15:30~15:55	54(49)
	b6		24歳	男	11/2(日)	晴れ	13:55~14:20	27
住民	c1	17年	51歳	男	10/25(土)	晴れ	11:10~11:30	26(26)
	c2	1年	30歳	男	11/2(日)	晴れ	11:15~11:35	28(27)
	c3	約15年	47歳	男	11/9(日)	晴れ	13:10~13:25	13(12)
	c4	未回答	未回答	男	12/18(木)	晴れ	14:40~15:00	9
	c5	約30年	未回答	男	12/18(木)	晴れ	未回答	25(23)

地図にコメントを記入していない. これらのデータに関して, 生活の風景の捉え方を把握するうえでは他のデータの質と差異は少ないと考え, 他のデータと同様に扱う.



図3.1 対象地広域地図

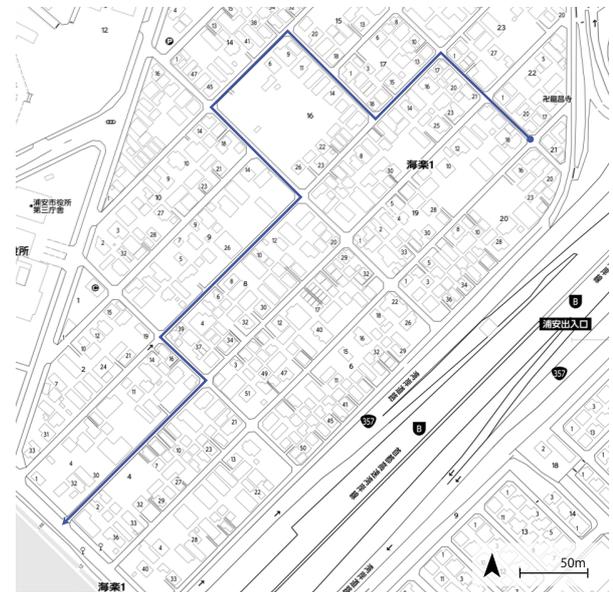


図3.2 実験の経路地図

表3.1 実験概要

日時	2014/6/21~12/18の10:30~16:00	対象地	千葉県浦安市海楽一丁目の住宅地の全長約800mの街路
被験者	初めて対象地を訪れた学生12名(うち建設工学専攻6名), 住民5名		
指示	<p>①地図に指示された経路を歩いてもらいます. 多少経路から外れた道に入っても, 経路を戻っても構いませんが, 指定された経路は全て通るように歩いてください.</p> <p>②経路を歩く際, 被験者が歩いた経路を詳細に記録するため, 筆者がビデオを撮影しながら追尾調査を行います.</p> <p>③経路を歩く際に, 生活感を感じたら, どこ・なにから感じたのか, 要因となっているものを簡単に地図に書き込み, その様子が分かるように写真を撮ってください.</p> <p>④写真に写らないような音, におい, 雰囲気などの要因も感じられれば地図に記入してください.</p> <p>⑤新鮮な気持ちでできるだけたくさんの発見をしてください.</p> <p>⑥実験終了後にカフェなどに移動し, 簡単なインタビュー調査を行います. 実験中に撮影した写真や記入した地図を見ながら, 写真や記入からだけでは読み取れない部分の補足説明をしてもらいます.</p> <p>⑦実験中, 何度も同じようなものを撮影していると感じても, 気にせず, 生活感を感じたら対象を撮影してください.</p> <p>⑧人や家の中など, 撮影しづらいと感じる物もあると思います. 極力撮影してほしいですが, どうしても撮りづらい場合は地図上に記入のみでも構いません.</p> <p>(※下線部は予備実験の経緯を見て, 先行研究における指示内容にさらに追加した部分である.)</p>		

3.3 実験で得られたデータ

本実験では、被験者によって撮影された写真データに関して、同じ被写体を違うアングルから複数撮影しているものは1枚とカウントし、それを有効枚数としている。写真データとインタビューの内容を基に撮影対象を特定し、生活感を感じる対象とする。さらに、インタビューの内容を書き起こしたテキストデータによって、被験者が何から・どのように生活感を感じているのかを把握し、被験者のイメージ生成構造の分析に活用する。被験者のメモに使用された地図からは、写真に撮影されていないものを抽出し、同じく生活感を感じる対象とする。

4. イメージ生成構造の把握

4.1 インタビューのテキスト分析

生活の風景から刺激を受けた被験者のイメージ生成構造を把握するため、インタビュー内容を書き起こしたテキストデータから意味単位で文節を抽出した。得られた文節を、被験者が何から・どのように生活感を感じるのかに着目して分類し、文節にIDを付けた。IDは1つの文節に対して複数付けられることもあるが、同じ事象を示す言葉が複数出てくる場合は1つとしてカウントした。また指示語でのみ対象が語られている際、写真データを用いて文脈を把握した。テキスト分析の具体例を図4.1に示す。

4.2 生活の風景の捉え方の枠組み提示

テキスト分析により得られた文節の分類と例を表4.1に示す。テキストデータは大きく、I. 生活感を感じる対象の指摘と、

II. 対象から想起した情報の表出に分けられる。Iは、主体の内面から切り離されており、対象の知覚に留まる。一方IIは、対象の知覚により主体の内面から想起された情報が表出した部分の発言を扱う。これらもまた、対象に関連する情報と対象から飛躍して想起した情報に二分できる。前者については多様な想起情報の種類が見られたため、表4.2のように更なる詳細な分類を設けた。また後者に関して、対象をトリガーとして想起した情報であるが、対象に関する説明とは言えない事象を扱う。

また、示した分類について特筆すべきものを以下で触れる。

1) 住民の存在

住民のアクティビティを感じられる事象、主に変動要素が含まれる。人の声が聞こえても姿が見られない場合は「音」の項目に含めた。「動物・ペット」は街中のアクティビティを感じさせる要因と言える為、この分類に含めた。

これは、 <u>それぞれの家のベランダのところに何となく</u> <small>I-ii-1: 要素</small>
<u>年齢がわかる靴が置いてあるのが面白かった。</u> <small>II-iii-1-e: 対象自体への印象評価</small>
ここは <u>ハイヒールの女性が確実にすんでるし、なんか</u> <small>II-iii-2-c: 対象と間接的関係な事象の想像</small>
<u>どっちはおじさんくさいスリッパが置いてあって、</u> <small>II-iii-1-e: 対象自体への印象評価</small>
<u>なんかそれが面白い。みんな置いてんだって思って。</u> <small>II-iii-1-a: 対象の状態への発見・意外性</small>

図4.1 テキスト分析の例

表4.1 テキスト分析から抽出された分類と例

I. 生活感を感じる対象の指摘		
i. 住民の存在		
1. 人	子供が野球してる姿/この辺のめっちゃ人がなんかやってたから、で、人がいっぱいいたから	
2. 音・匂い	こっから水の音がしてて、水の流れる音が/中から演歌が聞こえてて/すごい良い匂いがした	
3. 動物・ペット	柿がなって、で、ヒヨドリとスズメが縄張り争いしてた/犬、外にいる犬ってすごい生活感ない?	
ii. 空間の状態		
1. 要素	手作りの表札/掲示板/汚く駐輪されてて	
2. 建物	ソーラーパネルの家/庭/網戸になっている/雨戸みたいな所色塗ってる	
3. 公園・畑・駐車場・更地・道路	アパートの前に畑みたいなあって/公園/駐車場	
4. 空間構成	このスペースって他に何に使うのかなって/駐車スペースがここしかないから	
5. 雰囲気・シーン全体・シーケンス	家の前に色々こごちゃこごちゃ置いてある/なんか整然とされてない感じ	
II. 対象から想起した情報の表出		
iii. 対象に関連する情報 (表4.2参照)		
1. 対象自体・対象の状態	この街の燃やせるゴミの袋なんだな/これは浦安にありがちな風景なんですけど/珍しいなと	
2. 対象と間接的な事象	ちゃんと手入れしてる人がいるんだな-/親がいなかったんで/この量一人で育ててるのかな?	
iv. 対象から飛躍して想起した情報		
1. 時節・天候	灯油のボトルが外に置いてあって、ああそろそろそんな季節ですねー。/天気も良かったし	
2. 全体像	古い家と新しい家がすごく混んでいる街だったから/犬とか猫とかそうゆう動物いるのかな	
3. 観察者の内面	うちもそうだったので懐かしいな/今だったら盗られるとかそうゆう心配があるのに	
4. 知識	浦安の人ってこっからこっかが公道だと思ってるんですよ	

表4.2 対象に関連する情報の詳細分類と例

	iii-1 対象自体, 対象の状態	iii-2 対象と間接的な事象
a. 発見・意外性	あ、人いるんだ! と思って	サドルの所にパケツがかかってて、これで濡れない! と思った
b. 知識	この手の家、最近すごい増えてるんですよ。	100歳に近いおばあさんが世帯主ですが
c. 想像	犬のブラシなのかなって思って	室外機がブンブンブン回ってて、めっちゃエアコン使ってるんだろなこの家、と思って撮った。
d. 疑問	なにこれ? 思って。	この自販機使う人いるのかな?
e. 印象評価	なんか家族分置いてある自転車っていいよね。	おじいちゃんとおばあちゃんの散歩。微笑ましくて。毎週こうやって散歩してるのかなって思ったら、羨ましくなっちゃって。
f. 対比	花すげえ頑張ってるなこれも。なんか一番頑張ってる気がした。	古い家とか結構並んでた中、こんな金持ちの人もあるんだなと
g. 観察者の内面	こちらのお家は、毎回散歩の時も通ってる気に入ってるお家なんですけど	かなり前から存在するアパートです。(中略) 住人の移り変わりを感じながらも、人々の「生きている」感を感じます。

2) 空間の状態

「建物」には、建物全体やその用途の指摘だけでなく、建物の一部の状態や建物に付属する駐車場や庭も含める。「公園・畑・駐車場」は、契約駐車場など敷地を広く使った空地と道路のことを示す。「空間構成」は、明確な呼称のない空間や構造物の配置に関する発言を扱う。また、「雰囲気・シーン全体」については、多くの要素を含めたその場の全体感や具体的に生活感を感じる対象を特定しづらい空間を扱う。

3) 対象に関連する情報

表4.2に示した詳細な分類の中でも「対比」の項目について、シーケンス的対比や街の他の要素との対比だけでなく、珍しさに触れる発言など主体の常識、経験との比較も含める。「観察者の内面」は、観察者の記憶や馴染み、観察者にとっての一般的視点などが含まれる。

4) 対象から飛躍して想起した情報

「知識」「観察者の内面」共に表4.2のものとは区別する。例えば、庭に関する話題という点で繋がりがあっても、被写体と違う庭に関する知識であれば飛躍した想起とする。一方、被写体の庭自体でなくとも、庭の管理人など対象と接点がある事象に関する知識は、対象と間接的な事象に含める。「観察者の内面」についても同様の基準で分類した。

5. 個人のイメージ生成の特徴分析

この章では図4.1に示したテキスト分析方法に基づき、生活感を感じる対象及び想起情報について傾向を把握する。

5.1 生活感を感じる対象

各被験者の、生活感を感じる対象に着目し、その内訳を図5.1に示す。「住民の存在」の指摘の程度は、個人によるばらつきが見られるものの、来訪者よりも住民の方が少ない。個人によるばらつきは、時間帯や季節によって街の中で活動する人の程度にばらつきがあった事や、被験者によって人を撮影する事への抵抗感が異なる事が理由として考えられる。さらに、住民被験者による「住民の存在」の指摘が少なかった理由としては、

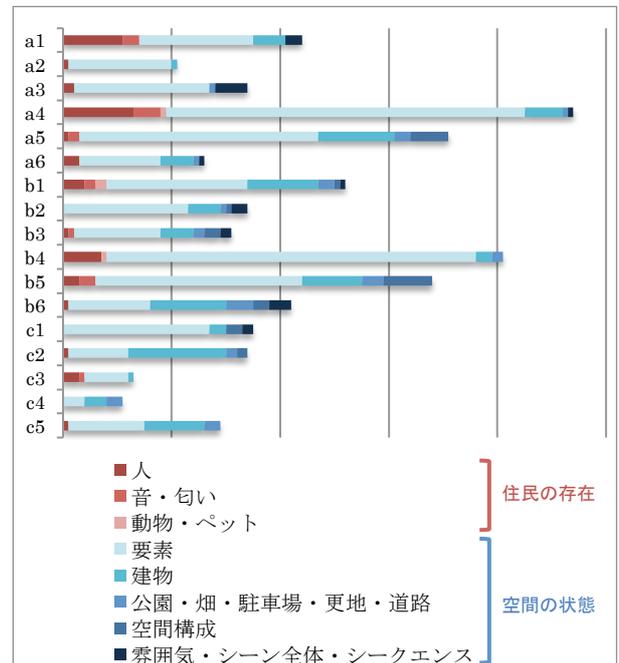


図5.1 各被験者の生活感を感じる対象種別の内訳

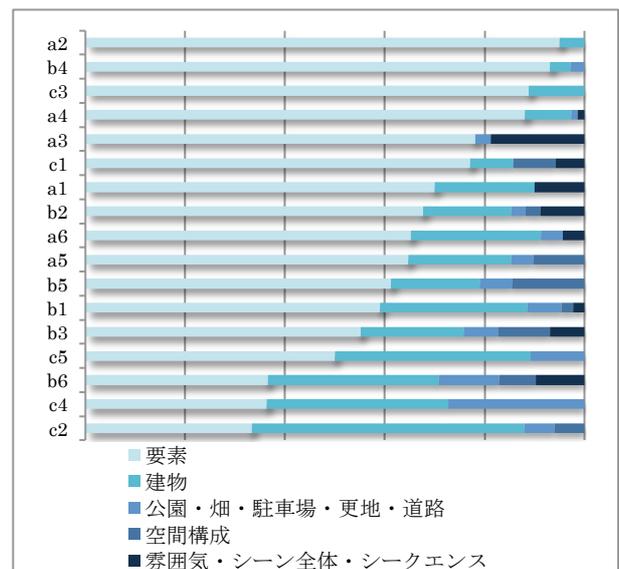


図5.2 各被験者の生活感を感じる空間の状態の種別の割合

身近な関係にある地域住民を撮影することへの抵抗感や、日頃身を置いている生活空間だからこそ、住民の存在を感じる事に慣れ、意識しなかった為だと考えられる。ここで、図5.2のように「空間の状態」の割合にのみ注目すると、多くの被験者が街の中にある要素から生活感を感じている。この事から多くの者は生活の風景を断片的に捉えていると考えられる。一方で、一部の者は主に要素よりも建物や空間全体など、街をマクロに捉え、生活感を感じる者もいた。

さらに、雰囲気やシーン全体など、街の風景から漠然と生活感を感じたり、シークエンスとしての街の風景の中に生活感を感じる傾向のある者もいた。属性に留意しながら詳細にその想起内容を見てみると、特に住民は、一見捕らえ所の無い道路や更地などにも言及している。これらは同時に過去の記憶や街の将来を慮るコメントが見受けられ、長年の生活により街の各所に思い出や愛着などが染み付いていることが垣間見える。また、来訪者はその場の雰囲気やシーン全体を捉えることはあったが、シークエンスとしての街並が生活感を感じるきっかけとなることはなかった一方、住民はシークエンスとしての街並への指摘があった。このことは住民の方が風景として捉えている範囲が広域であることを示唆していると言える。

5.2 対象から想起した情報

次に、対象から想起した情報について、その種類の割合を図5.3に示す。被験者は皆、生活感を感じる対象のみならず、対象と間接的な事象やさらに飛躍した事象へ想起を巡らし、言及している事が分かる。

来訪者と住民の比較をすると、「知識」の項目は、住民のみが想起しているという点に特徴が認められる。テキストデータから具体的な想起内容を見てみると、対象から飛躍して、対象地での生活により培われた経験に基づく地域全体の特徴・傾向に言及している場合と、脳内で地図を広げ、目の前の街並から少し離れた場所の情報について触れる場合があった。

一方で「観察者の内面」への想起の飛躍は、初めて街を訪れ、この街との関わりを持ったことのない来訪者も含め、ほぼ全ての被験者に見られる。住民によって築かれた何気ない日常風景は、主体との直接的関わりの有無に関わらず、自己投影などの形でそこを訪れた人々の心に多様な刺激を与えていると言える。

5.3 対象に関連する情報の詳細な割合

対象に関連する情報について、表4.2に示した詳細な想起種別に基づき、その割合を図5.4に示す。グラフを見ると、住民は来訪者に比べ、「知識」に関する情報想起が多いことが分かる。また、対象に関連する情報としての「観察者の内面」に関する想起情報は居住年数の長い住民に見受けられた。これは、対象地で生活を営んできたからこそ、街中

の要素と自身の記憶や経験との結びつきが強いためだと考えられる。これらについて詳細にコメントを見てみると、過去を思い出し現在と比較して感想を述べるなど、時間軸を追う発言が多く見られたり、記憶・経験・想像等の想起と、その想起に対してさらに感想や対比といった想起を掛け合わせていた。さらに、「知識」と「観察者の内面」の結びつきも見られた。これは、住民が対象地での生活を営むという経験の中で得た情報と知識が結びついているためだと言える。

「対比」に関する想起について、具体的にテキストデータを見ると、来訪者・住民問わず自身の地元や家との比較をする場合が見受けられた。一方で来訪者は住民と比べ、一般的視点との対比が多かった。

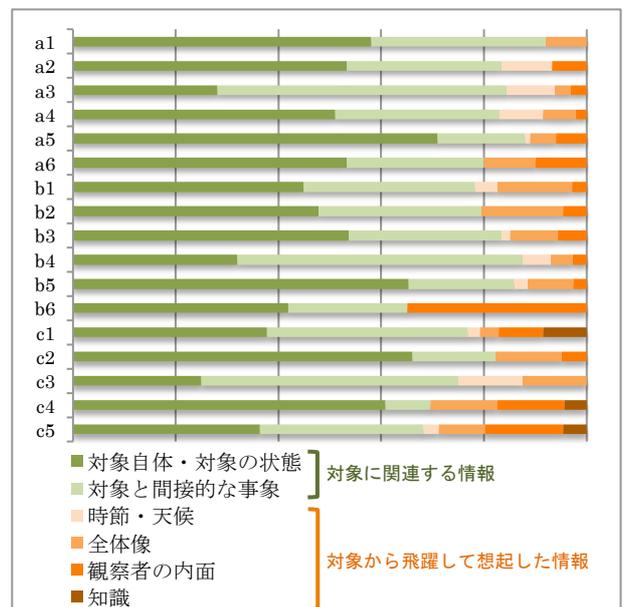


図5.3 各被験者の想起情報種別の割合

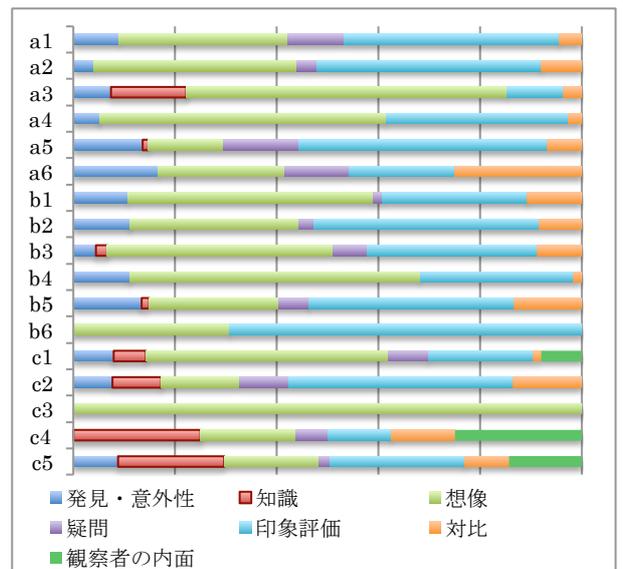


図5.4 各被験者の対象に関連した想起情報種別の詳細な割合

6. 生活の風景として捉えられた対象の分析

この章では生活の風景として注目される空間で対象がどのように見られているのか把握するため、注目されやすいシーン・対象に対する発言から住民・来訪者の風景の見方を比較する。

6.1 注目されやすいシーンの分析

注目されやすいシーンの分析をする事で、生活感を感じる要因が対象側にあるのか、また被験者属性によりその感じ方は異なるのか明らかにする。

実験で用いたデジタルカメラのGPS機能から、各被験者の写真の撮影位置を、図6.1のように地図上にプロットした。このデータを基に各被験者が撮影した具体的な対象を把握し、アングルに関わらず全く同じシーンを捉えているものについて具体的なコメントを拾い上げると、以下の傾向が見受けられた。

1) 注目された空間に目を引く要因がある場合

撮影されたシーンは同じだが、注目された対象や想起情報は多様なものについて、注目された空間に目を引く要因があると言える。この場合の空間の特徴として、道路からの見え方が開放的である、あるいは手の込んだ植栽や目立つ建築などの目を引く要素があり、そこから連鎖的に周囲にまで注意が及んでいるという二つのパターンが把握された。

前者の場合、住民も来訪者も同様に注目し、注目する対象や想起情報についても属性による偏りは見られなかった。一方後者の場合、来訪者は目を引く対象の他に多様な要素を指摘していたが、住民はそもそも注目する事が少なく、また注目する場合も目を引く対象のみの指摘に留まった。この事から、見慣れている空間への注目度の低さが伺える。

2) 対象に生活感を強く感じさせる要因がある場合

注目される対象も想起情報も同じものについて、注目された対象自体に生活感を感じさせる強い要因があると言える。住民の存在を感じさせる要素との結びつきが強い対象と、物珍しい対象という二つの特徴が見られた。

前者には公園や猫よけのペットボトルが挙げられる。公園に対するコメントには人の有無に関わらず、人に関する発言が多く、「公園」＝「人がいる」という自身の経験に基づく視点が垣間見える。さらに猫よけは、街のアクティビティを感じさせる犬や猫などの動物への想起の飛躍が見られた。属性による対象の見方については、公園に対しては住民・来訪者共に注目し、住民は特に季節感や風物詩と共に語られることが多かった。一方猫よけのペットボトルについては住民の指摘はほぼ無く、同じ見慣れた対象であっても季節感や風物詩など生活と共にあるイメージと結びつけられる対象は意識されやすいと言える。

続いて後者には、門扉の代わりに用いられている網戸や

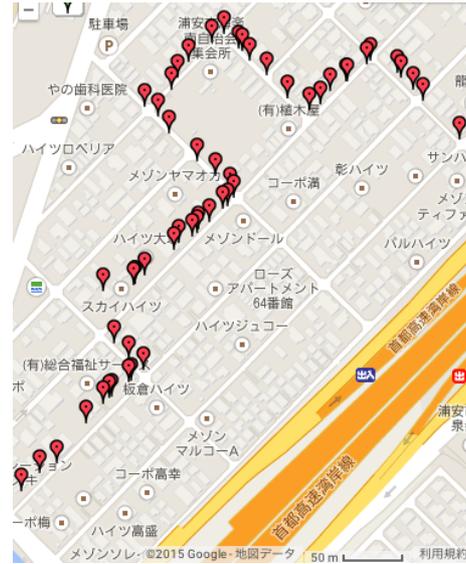


図6.1 被験者b5の撮影位置プロット地図

表6.1 注目されやすい上位10対象

注目されやすい対象	指摘数
洗濯物	73
植栽	73
自転車	52
家全体	41
看板・表札・標識	30
家前のごちゃごちゃ感	17
ゴミ捨て場	12
車	12
路上のゴミ	11
洗濯用具	11

戸建住宅には珍しい二段駐車場などがあった。しかしこれらの多くに対する住民の注目度は低かった。珍しさという点で目を引く特徴を持つものは日常生活の中で主体の感覚に馴染んでくるため、意識されにくくなると考えられる。

6.2 注目されやすい対象の分析

各被験者の挙げた生活感を感じる対象について、テキストデータから具体的に拾い上げ、注目されやすい対象を把握した。表6.1に示す、特に注目され、生活の風景のステレオタイプとして捉えられる対象は主体にどのような想起を促すのか、具体的コメントと照らし合わせ、傾向を把握した。

1) 他の想起は特に伴わないもの

この傾向に当てはまる洗濯物は、干され方など状態に関する指摘はあったものの、特に他の想起は伴わず、「生活感を感じる」という言葉でのみ語られる場合が多かった。ここに、洗濯物と人々の生活との結びつきの強さが見られる。

2) 状態の指摘・所有者の人柄への想起と結びつくもの

植栽に対する指摘では、状態の指摘とそれに対する感想に加え、住人の人柄が滲み出ているなど、所有者の人柄を想像し、合わせて感想を述べる場合が見られた。

このように所有者や地域の特性を想像し、それらに対する感想を述べられている対象は他に、看板・表札・標識や、家の前に多くの要素が散らばるごちゃごちゃ感、ゴミ捨て場などがあつた。家の前のごちゃごちゃ感やゴミ捨て場などは生活の営みの最終的なアウトプットとして、看板等や植栽は所有者が文字や形を通じて情報を発信しているものとして、地域の人々の生活を感じ取る誘因になっているのではないかと考えられる。

3) 状態の指摘・その背景への想起と結びつくもの

自転車に対する指摘は、置かれ方への指摘が多く、乱雑なほど使用感があるなど、状態の背景を想像しているものがあつた。他にも車、出しっ放しの洗濯用具などにも同様の指摘・想起が見られ、住民の生活スタイルを把握する手がかりとして捉えるきっかけとなっていると考えられる。また、路上のごみも同様の想起が見受けられた。

4) 状態の指摘がメインとなっているもの

家全体に対する指摘では主に、大きい、古い、昔ながらなどの形容詞や、家の造りや家の周りの詳細と共に語られる事が多く、珍しさが注目度をあげたと考えられる。その為多くの場合は対象の状態の指摘に留まったが、大きな家に対してその世帯主に関する想像をする、古い家に対して好印象を持つなどの傾向が見られた。

7. まとめ

7.1 得られた成果

本研究では、生活の風景の捉え方の枠組みとして提示した分類を基に、生活の風景の捉え方について各被験者の大まかな傾向を把握した。また、注目されやすい生活の風景に着目し、分析を進めた。さらにそれぞれで得られた生活の風景の捉え方の傾向について、詳細にコメントと照らし合わせる事により、来訪者と住民の生活の風景の捉え方の特性を具体的に把握した。

以上の分析方法によってデータを定性的に見る事により、生活の風景の捉え方の特性としては、具体的想起内容に住民・来訪者間で違いが見受けられる一方、生活の風景の捉え方の構造としては、住民と同じような捉え方を来訪者もしているという事が示唆された。本研究の成果として、生活の風景の捉え方の構造を図7.1に示し、以下に説明する。

人は目の前の生活の風景を通し、目に見えているものだけでなく、多くのイメージへと想像を広げている。時に生活と共にあるイメージへ想起を飛躍させ、時には目の前の風景からその背後に存在する人の存在を感じ取る。あるいは風景を通じて自身を投影することもある。生活の風景を通じて人の存在を感じる際には、対象と直接関係のある個人や、派生して地元の人々全体の傾向として捉える事もあれば、一般化し、属性と結びつけたり一般的な人々の行動として捉える場合もある。また、さらに想起を飛躍して、自身の常識や経験と比較するなど、他者の生活と自身を重ねる場合もある。この事は主体が地域と馴染み深い住民か、初めて地域を訪れた来訪者なのかとは関係ない。風景に刺激を受け、発露した想起の幅が、何かしら「生活」や「人」と結びついている点こそ、「生活の風景」を介して地域を捉えることの特徴と言えるのではないだろうか。

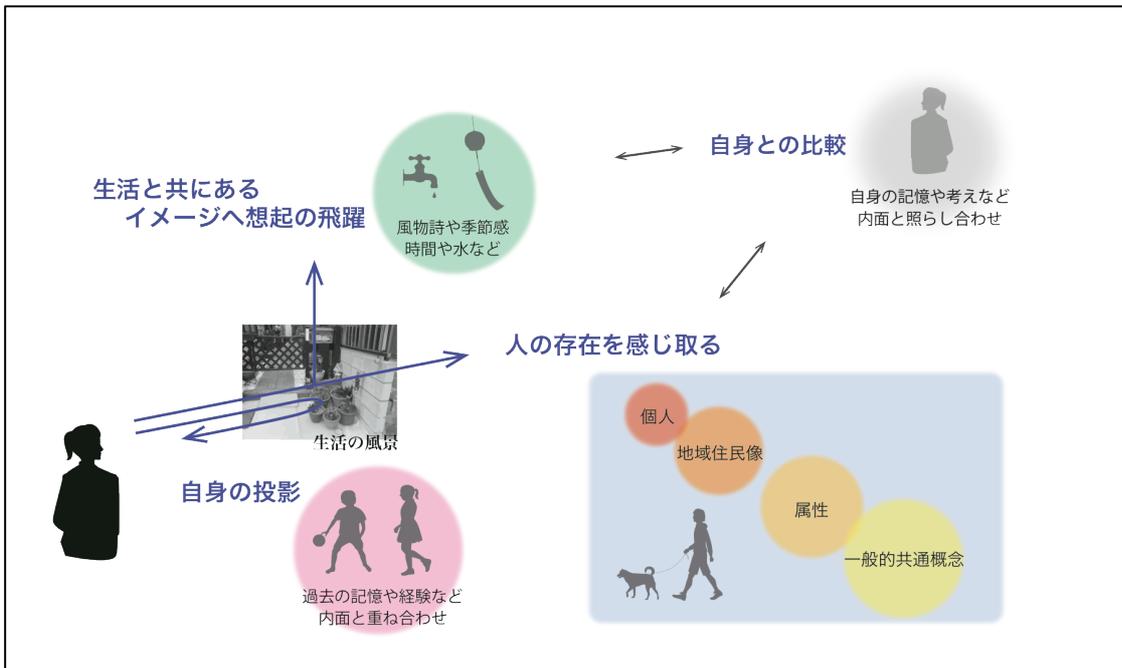


図7.1 生活の風景の捉え方の構造

7.2 総括

研究の背景で述べたように、ありふれた生活の風景は、住民にとっては自己を投影し、心の拠り所となりうる点に、その価値を認められる。本研究を通じ、住民のみならず来訪者も、ありふれた生活の風景を通じ、人の存在を感じたり、自身の内面に育まれてきた身近な生活を投影するということが分かった。さらにそれは、己の生活観を見直すきっかけであり、ひいては社会というものを捉えるきっかけにもなっているのではないだろうか。身近な生活の風景の価値は、多様化する生活のあり方を受け止め、自身に投影し、考えるきっかけとなりうる点に、住民のみならず来訪者にとっての価値を見出しうると考える。

7.3 今後の展望

本研究を通じて、住民間でも生活感を感じる対象や想起の幅に大きな差が見られることがわかった。今後、居住年数やライフスタイルなど、より多様な背景を持つ住民に対し実験を行い、それらを考慮した実験・分析を行うことで、さらなる知見が得られると考えられる。

さらに本研究では、生活の風景の捉え方の構造を提示した。この構造は生活の場だからこそ成り立つものなのか、あるいは住宅街とは異なる、住民の生活の積層が見えにくい場所でも成り立つものなのかを確かめる事は、生活の場という環境を考えるうえで有意であると考えられる。

〈参考文献〉

- 1) 社会法人日本建築学会, 生活景, 学芸出版社, 2009. 3. 30
- 2) 中村良夫, 風景学入門, 中公新書, 1982. 5. 25
- 3) 中村良夫, 土木工学大系13 景観論, 彰国社, 1977
- 4) 尾野薫・星野裕司・増山晃太: 生活史から読み解く生活風景に関する一考察, 景観・デザイン研究講演集, No. 6, 2010. 12
- 5) 吉本正樹, 舟橋國男他: 日常風景の捉え方の構造に関する研究-芦屋市をケーススタディーとして-, 日本建築学会近畿支部研究報告集, pp457-460, 1997
- 6) 野崎俊佑・千代章一郎: 尾道市の斜面街区における生活景の形成, 日本建築学会中国支部研究報告集, 第27巻, 2004
- 7) 野崎俊佑・千代章一郎: 尾道市の斜面街区における過去の生活景と感覚の問題, 日本建築学会近畿支部研究報告集, 2004
- 8) 野崎俊佑・千代章一郎: 尾道市の斜面街区における現在と過去の生活景の問題, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 2004. 8
- 9) 古川日出雄, 佐々木葉: 主体の行為に着目した生活景の記述-岐阜県郡上八幡を対象として-, 景観・デザイン研究講演集, No. 7, 2011. 12
- 10) 藤澤奈緒, 佐々木葉: 風景の多元性に着目した地域認識に関する研究-鉄道の車窓風景を対象とした写真投影法実験を用いて-, 景観・デザイン研究講演集, No. 8, 2012. 12
- 11) 渡邊優, 佐々木葉: 来訪者による生活景の捉え方に関する研究, 景観・デザイン研究講演集, No. 8, 2012. 12
- 12) 中村良夫・鳥越皓之・早稲田大学公共政策研究所, 風景とローカルガバナンス 春の小川はなぜ失われたのか, 早稲田大学出版部, 2014. 6. 30
- 13) 佐々木葉: 私の風景の日常性と地域景観認識モデル, 景観・デザイン研究講演集, No. 8, 2012. 12
- 14) 増子泰亮, 佐々木葉: 都市災害時の住民組織による復旧活動に関する調査研究-千葉県浦安市を対象として-, 土木計画学研究・講演集(CD-ROM), 46-pp. 168, 2012. 11
- 15) 温井亨: 生活・生業の場としての歴史的風景保全の研究しに関する考察, 日本造園学会研究発表論文集(19), pp457-460, 2001
- 16) 茂原朋子・渡辺貴介他: 青年の“原風景”の特性と構造に関する研究, 第26回日本都市計画学会学術研究論文集, 1991

[外部発表]

第10回 景観・デザイン研究発表会 ポスター発表

「生活の風景の捉え方とイメージ生成に関する研究-東京郊外ベッドタウンの住宅街における生活感に着目して-」
2014. 12. 7